



元正尚記  
三



^ 13  
2696  
3





元正間記卷之七  
目錄



一 大久保彦六宅神祇組寄合之事  
 彦六腰元及、憲等之、夏  
 彦六北道及身、投之事  
 并、屋鋪之、夏

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

元正間記卷之七  
大久保彦六宅神祇組と合々車  
並彦六腰元彦と彦善と彦  
叔毛真須と彦怪の車沙法とルリ是も  
神祇組の仲間とヨ書院組を相勅  
也縁千石のヨ旗本大久保彦六とヨ  
彦浦の牛のヨ門内見自石の彦と彦角に  
ヨ江戸中ヨ隠とヨ天樹院様由  
殿海之水野十席たんと水突の中  
ヨ教彦系彦と彦大久保彦六

元正間記卷之七



彦彦六腰元彦と彦善と彦  
叔毛真須と彦怪の車沙法とルリ是も  
神祇組の仲間とヨ書院組を相勅  
也縁千石のヨ旗本大久保彦六とヨ  
彦浦の牛のヨ門内見自石の彦と彦角に  
ヨ江戸中ヨ隠とヨ天樹院様由  
殿海之水野十席たんと水突の中  
ヨ教彦系彦と彦大久保彦六



さしやまふ六つさうらめを此の抱より  
生國と相換の縁に奉りし田舎の三回  
法者たれとせし御志はらしき女と  
る抱しきさあしと争の扱ぬ奴いづき  
度浦へ出さしし我孫子産くまを  
貴人の所口上へ傳へしとさし  
十人より揚ぎ者、物を廊々眼子に遣ひ  
しとせしとさしとさしとさしと  
付能見まといふとさしとさしと  
梅とさしとさしとさしとさしと

髪を結ぶと髪其の方たのりしとさしと  
能はた風平仕立早業に度及し出せと  
たり客の面しみ事を傳へ我孫子目利  
ありしとさしとさしとさしと  
中よりし、彼をしを餅と行水とを額  
を利ぬ白粉を塗る髪結ぶしとさしと  
うとさしとさしとさしとさしと  
をんとしとさしとさしとさしと  
いふ年を及し名を舟南年十九女  
しとさしとさしとさしとさしと



又も程後え中よし上越女と云ふ人の  
うらてら浮き出し客くらしんせぬ人の  
そと思ひの種とらわ年々けり  
又も六北道 後身と投る事  
先四屋浦く由来  
叔老六六容の滞らし侍遠く志らし大酒  
叔照の鳥羽後り右帰完より及し幸利  
又も六神祇組六法組とれと親お中に  
し具放しれ内年と親えおとり一戻り  
真一子にやう一能勝えみお六人今已年

何しと石抱りよと吉原界一通い  
お後と名抱日教のまよと隨ひ英色と  
迷ひとくしよと引上懐え後後合  
よ車し一表毎よ一様酒の砂とせ枕二つ  
並し一人の威勢よ一妻の役いふと  
つと松ちうれたお後と生國后伊よ  
さしよ訓條の辰五昂進二世と整せし  
男をいふ松の伴と大女年よ拾うら  
甲丸下よ進えのくしと下水及し釜れ  
火焼端洗ひ怪しよとらるるしと

申すはるるに随うに民いふや無法の事人  
てい世道中と力よ及いたる所は  
よし成程く本條仕急を諸仕急沙凌  
編緬の南世に急を急の常 姚端緬の由  
まよ返するるを其介少道具揃う  
くい言令示調ひまりいりたる  
うはとりの後、活しるる河太し  
柔果いかり一巻六介をたまやう  
役格若山たるる牙振に大の眼血  
助を法大悟るの深えく何れ

腕押すり大音と秘心と隨うに  
へは穴ぬき草すりにするそとて  
を掃く真身身をと唇ひ命を口取  
るる係し連と伝せぬと是皆極  
まよむに扱し志ふとい女か  
よ真坐をこまらる或はま  
ふ石取の集年をさるるか  
とも泣きもくるとに  
しし志うのし叶ぬはよ大久保  
思ひを掃りりる初る月白を





又繰返し一かきいして九投分不阿しき  
き投不足ちうと云十投揃ふと四世  
海と後し時及し一いつ年  
急に入大切よ侍り端りくんと投十投  
恒年おろし入ましと支那しおろし左  
急を入くそつてふんよ長そ一投お投と  
うそつてし九投分お終つてりる  
横目して初め付十投後しと返不そり  
仕振る終り終りか終りんとと云後  
号飛たうと又うそいいう程かきまて

たりませぬと云不足し道理己の志の叶  
はぬと云隠し並しお後を責らさの  
と怒りしせは後のもて終り  
たと終を吹余はんとて終算一垂して  
見よと責らお後し身を記肯を  
かきつけらしよ一揃つたや何程つき  
事成た貞女の道と欠ましと思ひ  
格めし歳友しうそつとくそと云六  
格實しと飯喰しうちには後とせ免  
又字赤い見よとや不足らたしを何と



家内子に後ろんつぬと縁をふと人ねま  
井戸の内と極下りしんさ知り水底  
よろやまの山しき後ろ死骸まらさ  
非道いといんし山を乱れし疑い  
なりおぬく死骸いんさ後ろし  
おぬまの山を降りて日と休まらん  
をしとさましお怖れ入より居仕の  
下女ししし一而し集り今朝の宿り  
をぬしし人の氣し心その仕かき  
お後ろつれお名役とし思ひ線香まき

小聲しお称名いりしし子休ししし  
し更し夜とた午家内志ししと井戸の  
さ方午後ろ声みしてまら三の四と集  
いししししししししししししし  
信出に声しをすしとまらしししし  
身の毛よりしししししししししし  
ししししししししししししししし  
力しししししししししししししし  
開しし井戸の石を伺いししししし  
日後ろ時をいししししししししし

え来石款の大之保土六から凶妻へ付  
に山一を孤推の石者成りまゝに夜お人  
をたしれと申何程の事と云ふと日  
接し切るとれらまゝに夕暮り消し  
し升戸の中は燦出と云ふに去るに  
志しし念佛の命と云ふ事免角中  
うちおれし時れら夜々人し清人を  
せ乱かたりしを授けしと申後  
此月松の義と云ふ引文時ゆか  
りしにるるくを承取と云ふ事

委細と云ふに元骸を引れ法人の寺へ  
葬りし其日のうち人足をもけて井戸  
を埋め家内の者た平太の状他を  
つとむと云ふ口と云ふ事  
如解しし居りしをよぬ三日の秋更  
人志川と云ふ言や家出障子等日  
物凄と云ふ事と云ふ事井戸の  
志ししれし事と云ふ事と云ふ事  
さういふ事と云ふ事と云ふ事  
さういふ家内の男女と云ふ事

おそろしき言併唱い物歌古見くはま  
らいつ年し度々出果てたる六丁を不飲  
者たしと思ぬぬ好まらぬた召仕の十女  
と申す家申の若の妻子た二日之ま  
を申す皆こりしを屋敷を逐出連  
いれて徒然書下紙たよ玉とさ  
り身仕止しと申す心白れを人か人と  
欠落たりしおろろの大久保た六兵衛人  
あつ自かり食禁たあつたりし情を  
おろろ不通たつは是化か水也十郎たら

いあし趣を修りりれと水解に仲写此  
事及自分の趣を三度六を引取大之保  
のるあ子いん斗と名をて随分隠家山  
りしてる重りしと一両日送ると言や  
と屋上急平急色替りし此振し  
形つし女のま似口をさめてをらあ  
三らと集し如しつれしやと及た  
つしかけをも倒しつれし叫い  
十郎たら情を消し度々死果の石中  
よお邊たつしつれし思案と

とくに江戸二人とあつて男三の園山と  
まらまらとあつて者一のケ根の事にかとらつて  
宜山伏板も頼もれも死なれを候死  
次男と一宿のをいふと入道とある人  
とまらまらとあつて者一の園山と  
も止事とあつて者一の園山と  
頼もれも死なれとあつて者一の園山と  
事あるに此事江戸中まらまらとあつて者一の園山と  
まらまらとあつて者一の園山と  
の上よ不慮の大事とあつて者一の園山と

けり板亦大久保の面をいひ  
やいふと名をいひて誰をいひて  
しちうとあつて者一の園山と  
いひて者一の園山と  
人といふとあつて者一の園山と  
十一年十月大塚の早急町から出火して  
小石川傳通院の石の牛の提所神  
主板と二口牛といふとあつて者一の園山と  
下町一帯は八丁塚まで火あつて一日半  
伊川のりちとあつて者一の園山と







の存人七依の大塚橋の山勝の浄瑠璃  
より小世を十郎の情を伝へて大行り  
まゝより四坐の歌舞妓より平野を  
とてそ叶はぬ格もを答ふをかい就中  
勤休り度よい上子の役者村山四良治も  
平野を十郎の情を伊夜火守妻  
の小世よいか秋をばはくか葛村治を情を  
三行りかお夜を妻の小世よいか葛村  
治を情の横忘る四をも隠し殺を仕  
より日くの見物大入申右野一物に

水野十郎左の義六法組の旗本を引連  
携し中の間張切り西の装束に合際  
りて切替り紙子を急ぎ進むらるるの  
袖より相織花具らるるの長大小合の角  
澤輝て一際目立出立の児小世五人皆一  
様よは京の振袖合紙の平之浩より髪を  
結せ花をとりて装束に同道の旗え  
るをいし伊を掃蕩其居役者も  
多よとさるる法見物し狂言の持友は  
んを思ふをねる者らね二丁目

中幕より猿着きたらり高井は活き物の役  
小次郎の役は廿秋地は之を四とくを三と扱ふ  
之の中のおし道と来ると物人半を賣る  
半を賣りて舞臺前より来り人丁を多  
し雷十右郎としりし所男達の膝を上  
半を賣るを妻の人とよまゆし雷十右郎大い  
怒りしとゆめくゆめか割込め安ん  
けぬとよまを賣けらりと笑ひ何  
者成を廿右郎と来り我はと出来ぬ  
そのよまを引掛出んとよまのよま

引出さる男とよまは江戸中に隠の形い  
雷十右郎成を膝を隠しとよま消  
をれりしとよまのよまを半を賣りしと  
よまおし道とよま雷十右郎おし  
おれは廿右郎は隠のよま来り本所  
は坊中おし男達おしとよまおしとよま  
奴ら引掛出んと雷十右郎を引  
よま雷十右郎をよまのよま海とよま  
半を賣りしとよま見はるしと来り本所  
首取しとよまおしとよまおしとよま

二つ三つ瓦拵は希ら雷振り免しと位  
出るとありや喧噪と語見物強まると  
仲留の者在四方を来り大騒ぎなり及も  
知様おろ大音にて天下月星もシヤを  
水地十郎右衛門見物よ来り居るを騒  
を止し静まると鶴の一層不羽の雀  
水地後トヤ泣きまねと夕暮り其居り静  
来り物きたる十郎ももき貴と尻  
まにきりたふしとて其をくいせり  
いふむ神を見し十郎右衛門版を

我々目通に推し示し誰々の地  
之りいて来きとき畏れし例  
今時金右衛門と云ふて金の字を  
黒瀧子のちお織子朱鞘の大小  
拵しきりおむり扱ふは  
と雷りその首よ子を祀り伏し  
申す系しおむり始めい  
大江山より酒吞童子を  
板田の金時合た徳大割不奴の男  
雷めりしと申す

太皞の草念佛をくもろく葬・礼の仕  
度七よと押付たり雷も流石の者なれど  
金時よい経叶りもしととらめ乃  
多ふ多らたうりり其仲は元々のまゝ  
賣らうそく途去りて其居は流し  
大強さるるをま始として其後者千  
多と也元道しとせ出しとを上げ  
刻とれ其其付五六百有てたと見物  
人の内方六尺余りの大男一人ありたよ  
是茶本綿の布子団色のかしゆ

お織三尺を拭きてをくもろく見物人を  
押して金時よとむしとを上げ侍る  
はらしとすも始りといふ私し  
了了腰をき見物人へ何許とむ  
ささいこりますまたや免ちませと  
之形つし金時よ腕首掃んとせらる  
細中し腰りちを上げ梵天帝釈地と  
金時形らく近し其の傍隨院もき  
高賣の喧嘩の中買刷毛の序も貞光  
未武 淵保昌世界ておゆと見え

今を去る情はすまじき事なりとて追ふも  
たゞの皆はかゝる事にてせらるるに  
言ふにやめしことありしに  
横津をよむと志め雨降まらぬ  
腕をとりけりし事いふ事妹の  
事し事共なり情随院に  
言ふに是れ目下未だ  
なす津をよむ事下谷情随院の  
戸大檀を情とて命志し  
その堂像神祇組して佛道

宗門の娘は水に回して  
やいと心はけりて尻列  
と婚はし先子續か  
院より同為放駒四席を情大  
佛小八劫之故注古高貴  
和尚の引道すし  
自ら腕押まらるる  
上も令時を下方を  
と大盤石の  
令時常はまをりて

大落高より来りぬと芝居に堪へては先今更ら  
先知と追知一と鼓志より子打出に野  
十郎たか眼の前猪んのか来を町余よと一  
是も急なたいいとちとぬ大は情まで大事仕  
出してていよ子石をもし灰ナナと後白は仕事  
とつと事と面目ちくしと一と芝居が  
如く帰る事利情随院と十分に金付を  
印より身思ひの作と喧嘩子勝其外の者  
たし水野を相よよとやめた芝居を所へ出  
るとと冷方ぬ一と令付とと不運ふと

七六人下端身らと大小の茶・水とん物人  
まきれ羽織よかゆてを流しけうの場  
橋まで来り一と如く向ふ方が編みうむ  
割たそのせり第下々商人来くして令付  
をんはささささささささささささ  
見定ぬいこころゆい去来吉系衣紋板  
りて四五人追は来と踏きたるま  
り来西目形もを流しへたさささ  
冥途の小八令と見え交り下り喧嘩の焼  
跡小八ら端とささささと小股と

多のち橋をたしを遂に投じしり打を  
引河仕をたし余斗を賜りし泥の中  
へおのこをたすの代りし七人おまき  
た利を念ひけし令付し一念あきらむ  
り三白のこらせし志せんとあはれを  
と耳ししけしとらぬいふしゆりけ  
食付し漸く同しと上をたたり吼は  
きやたつるをたすけし先の如く  
けし命のあしりしとらぬい倒さ  
迹を新

水井後北道場隨院を清

定取敷之事

下昂とらせ先未代名を跡を情隨  
院を清い十八歳方十八年二十六才まで  
男道法よりよきとせしにたす  
法人の無礼知せし我流を情随  
かあしつ活し後世と情随をたす  
山並走一し人をもとに世上  
を和しつと下抜す事好く  
友を以集る彼ら下の男をい何



第号情さし者成しう今度赤田の芝  
居りては其後を相まよ喧囂を仕せし  
日幸一の子柄者と江戸中具の真の情隨  
ちを清水地し迹らきたりと評判はく  
け喧囂のはふしを問いた吐しせに  
能はるる蘆の瓜を隈に町人よと判りま  
男の喧囂せし日方三日目し供をばさ  
し侍を人來りし情隨院を清水  
宅いらさしとてしうやとてしういお節  
ちを情を宛にさしお節をさしとてし

某を水地十郎左の方ちを越しし使者  
てしうし是を存しお節ぬや使者とく  
しうしははれ先とて先へ通下しれやと  
之をしうしは通ると申す通し通すの  
いん中人の辨りて其まをばさし主人  
十郎左の申す越しは毎夜お節を  
兼及しとて先不情と急しとて先  
表田の芝居して不意の喧囂を  
其節水地し家来酒を搦碎し其後  
同人の方しとてしうしとてしうし







石中身中下はわらへ物清くして飛々へ  
しとをたれ上りしきけりもを清く入るる風  
情より林者こととの下昂上厚き口詞を  
よきき細き口清く中上極しよきねし  
物らいつを以て裁けりしとよき清く相違  
らもせき者りしよきをよしと中下は区を  
仕る思ひ性五六人をを飾りて出立たり  
追々料理をよきき十昂なら自身者を  
列せりし二け七菜よの入りし秋立  
よきし沙汰よ及んしし七龍の汁暮の麩

舞とよいしよ存の外詰拵ぬる膳部ゆへ  
儀名のせき清きよしよらのあきししし  
食車の留し腰物をもよふしに相伴人  
を四天王十昂なら上中ししし膳部  
吸りのし教をも替換物斗り酒と伊丹  
の三年同の上清白の飯を登引けに  
し大酒盛後讀み教よ入玉らまはし  
しよん出る吸りめし四度よ及し七合入  
の大登をよししし細り始りもを清く  
した者よよしし自光未武入るる

今の押しのと志い付又保昌も出てあ  
ききしるし長き清も大酒をれを昼時  
の香付け相手を名にお水地の大將  
四つ土の者たし人年穉造一一大酒のみ  
もき情も吞伏人と入替り立替り教も  
いとま子一上ねまら大盃も持あくと  
今秋一しし押さる貞光砂をとらと  
そそ飛を歌とつさくくるもき清尻去り  
ししゆをんしとまを上る保昌た  
たか浩をさしせい年をらと青と

もき清大いしはり果およゆ免と跡一退  
けりかを伺い貞光持しる毘子を長き清  
の自見く投付しり換しる酒眼中に入  
るししゆとしゆあせり成処を十房奪り  
抜しるし長き清うたりの頬えんあきと  
ききとしし押付しり保昌と未武たたら  
まの腕へ切込しりけけはもき清らけり  
と抜んとししゆと深のきしる必りや  
後の枚戸し小尻はしりいで抜もらふ  
事し能いに其旨より金時大力の陸を

走しにふれまき出せんはのいしん今てそ  
情はそと狗えん七の場を穂と白く  
突黄より鬼の神のま成まを情りま  
酒すまの香より眼法一にあま  
ふ人よ取まきまむらん形もろふま  
切殺しれり十昂たらん今てそ  
遂しりと死骸いよと川へ捨よと下  
しと月て仲るを菰い包と板の中に  
此等と橋を流しり水地り比具  
水道の振と後日十昂たらん仕業と壁

悟まぬ者い下りるるり利

一 男連小水野  
一 水地十昂た  
一 神祇紐  
一 仕業と壁





新田河野物之目録

一 新田河野物之目録

目録

新田河野物之目録

元山間記卷之九

男達等水野河打擲之事

一 水野河打擲之事

身之主人三日同日之七之儀、行方之

一 身之主人三日同日之七之儀、行方之

一 身之主人三日同日之七之儀、行方之

一 身之主人三日同日之七之儀、行方之

一 身之主人三日同日之七之儀、行方之

一 身之主人三日同日之七之儀、行方之

一 身之主人三日同日之七之儀、行方之

死骸を情随院に葬り七日の吊を  
念頭よりいと恥しむ利夫の度大権を  
方より亮の男を十人撰て其令  
取し其清の仇討仕込し其年をお讀  
りしりし中にし度大放弱を既の  
車をれと多ゆしよりし其恨を  
是しと云い皆しを打てしれり上越  
追善らとてし度と何事とやらし人  
行し其清の仇と移し其秋は皆し  
私宅へしとて歸りけり其水也後

運の極めと知らせしし叔水野をけし  
其清の極めと知らせしし叔水野をけし  
を達し大考の右の程を今日七日目  
ら吉原へ来て追善の海人として其  
意の難本仲官島居控ええり本九人  
松中次之弟を同道しして四下を供  
召連進し石川をとりお茶新吉原  
江戸町大妻屋へ舞込別所の遊女九人  
り客九人十八人の大一新舞を  
其日店讀し中書日し逗留し三日目

の早朝より私宅へ歸りて一進をぬの道河  
教をさすむけ千鳥足一と大門を立出  
七子へ上ると朝日一山にぬめの方向にて  
新所よりといしとありぬ七子下分十八人乃  
男達皆一松の公お家木も力を帯りて  
さしつと誦出りて多岐皮をけりぬ  
皆くまらんとりて場所無くぬれぬ  
何事ぬけは場を道人と見ぬ辰一と  
ゆすくると所をて辰大杖を傍に二せに  
氷地とあり後ろのるふむとと抱きぬ

おら狼藉さすか者と皆く立降下ぬ  
さる右皮一と致弱四昂を傍に本皮一と薩摩  
厚多昂紋三昂皮一と真途の小八四と五  
等一と大併一併一併及法平・神田の法言  
をさしつとめとと皆を人つとむい令  
去らぬのす法者先かれら青子をいし  
せぬといひしとと、初ら伏しり辰大杖を傍  
水野皮の物をもと初らけり井く親方  
たさそを傍を能し謀り報しぬた  
期をさるに上りて切報はと安りぬ

道のこまき人々收一殺にけし服袴あり  
お年ぬきし志ありのうちに生る生涯晒  
しりの末い様多のいかにさらさよを  
かきし衣ち倒し度大槍を傷くうりそり  
裁ししぬきと懐中を刺刀を取出し  
た段ならく白果をそき耳の根をすけつと  
切しけし三人の命むしめ四をました  
こゝろ片端うり耳をぬきそいふ事  
大小ものをいぬるをたししこゝろに  
折せしのはげしき存念を悟し或は踏

倒又いどよの中いりち込し十八人の男達ホ  
皆一回平子とさうけしとさうい  
るが歌唄ていりち連えし帰りに  
叔水也とさうめ九人の女を羊り取を  
す七人耳鼻をそくは踏めよき漸く  
命ゆり女腰とさう折き死ししをた  
信しし血よて西を深くきかぬぬりの人  
さうめいさし見物も九人の者さう  
七よの茶やいさしと端々を天の阿  
いと九人の者さうぬとさうづり西を隠して

多々念取つて、久生ノ一供の者、編言、  
くまら、血まふまこと、本と、ねを、か、く、所、  
通、より、志、ふ、見、物、人、小、石、川、を、追、欠、て、誰、人、  
ち、う、り、と、向、き、く、く、多、世、皮、と、く、志、く、ま、り、利、  
片、付、子、以、事、口、戸、中、大、江、利、と、成、り、く、前、代、  
未、年、の、事、在、之、則、く、年、へ、お、志、り、れ、目、苗、  
監、物、皮、へ、口、内、言、を、監、物、皮、自、ら、十、席、た、り、  
少、部、ま、く、家、来、た、ら、出、侍、の、者、四、十、  
九、人、遣、を、く、中、後、使、を、お、付、く、れ、く、志、に、  
お、付、く、大、目、付、横、田、侍、中、ち、皮、十、人、目、付、

久松内記皮、ア、仗、多、新、本、根、長、三、席、口、徒、目、  
付、十、二、人、ア、少、人、目、付、十、八、人、人、和、山、名、勘、十、席、  
を、召、連、ら、く、十、席、た、り、方、へ、ア、越、り、  
水、中、監、物、皮、完、竟、の、侍、五、十、人、足、燈、  
か、百、人、を、下、志、く、く、十、席、た、り、を、浦、行、  
く、め、監、物、皮、自、身、十、席、た、り、二、病、床、へ、  
踏、込、を、他、を、い、と、せ、く、十、席、た、り、を、ア、後、使、  
の、前、へ、引、立、来、く、く、少、人、増、く、十、席、た、り、  
の、面、神、比、目、一、真、を、是、く、く、け、る、を、ち、  
横、田、侍、中、ち、ア、書、付、を、い、元、く、讀、り、

十島右方を以て諸代の中を謀むに於て其母を  
思召し如教々年不修海世上りて隠き如く  
別け度の不覚 將軍家の御名を不  
事其科十罪に於て百餘地を召上平侍  
同様より仕盡く作舟者之とて作後り如  
小人目身三々十島右方を書院の趣  
引下りし山名高十郎兼く自を判  
しり家末四十九人のうち家老用人  
七人より作後りしに十島右方の  
教事不修如くを家老用人の役

しりし法外に入に之人とて法外の振  
舞ふに事不覚し年より古如罪  
より作舟者之十島右方を海まで七人たり  
首を判り利如如と侍方の者を斃り  
其公人の年級一命を以て免にす三ヶはを  
以て捕ひて追放し其作舟より同日十島右方  
日道のゆか旅に於て居候し志三々九島八  
杉本次三月甲親如く引下りて後使行  
と下十島右方日旅より作後りし人たり  
浙飛く作舟より水野集人正回監物



刑部松平久々忠大因考く名津田  
小吉の條山基の昂け面をけりぬ五十七  
人日本大小神祇組と云へり嘗て八丈島  
三宅島大崎おへ遠信は御有たの事  
大崎島与力両書子力伊賀甲賀伊先組  
与力或は伊徒五杯の中男連の事も是  
迄白ゆ吟味して悉く召捕せ遠篤  
又と伊追放およぶ御有たり斯中  
伊持組のより申上勘解由此度盜  
賊役は御有胃考と名の付る者

根業を絶へ奉り了仕との上意を蒙り  
勘解由私を歸り申上著提所へ使者  
を立今夜某次盜賊改め役は御有けり  
勘仕申上紙書は祖の忌日より一載病  
死是をいれ寺詣仕官捕し申上たは  
申上御有けり治ゆとお祈り自分朝暮信人  
を御持伴考を御訂付し申上天下乃  
考申上勘解由悪黨の奴原をくし不始  
召捕り江戸中の町人を御申上戸を宛手  
たし御有御有せんと折言を申上り



勘解由組の同心大智引連不付、唐大  
権を擧ぐ家へ潜込権を傷く母女房十  
一才よ成りし、忤権六小者一人と家内  
四人を召捕権を傷く、今朝か  
兵出るもの、隣家の者た呼寄  
ても行方志し、兵は北よ及も兵  
人笑斗る捕く、海と道心物上地、廣  
水海よて目明し、石は流さく、大井  
けく、むく、ふが系る、放駒四郎を傷  
めて、ゆと、捕手の西へ、慌い静く、

行む、不致弱と四人の者、手拭、おめて、  
を脱し、も、けく、ふ、系る、をい、あ、の  
し、も、思、い、来、る、処、を、因、心、西、人、た、た、右  
捕く、も、こ、こ、を、四、郎、を、傷、く、た、ら、と、と  
六、郎、を、傷、め、け、く、ふ、く、む、く、あ、六、間、突  
倒、く、ま、あ、い、曲、者、と、云、右、海、の、因、心、六、七  
人、く、く、追、い、ん、き、た、右、の、ま、よ、二、人、を、傷、く、ん  
く、四、人、を、投、お、し、其、中、く、折、穿、く、又、起  
上、り、く、足、を、ん、く、ま、人、の、捕、手、の、因、心、上、に  
た、り、利、下、よ、成、胆、合、く、十、を、に、く、あ、ら



多作舟よりとりとらへ度大少くも南無三尊  
をの運命是紀しねし母妻子を召捕ま  
何面目をせし暫しし身を隠れし  
是方去年中山皮石と名付之とせ出  
るれ迹にねと町入大智政方追  
りては槍を清まきり子はうい多  
天下り去りきし此槍を清迹隠し  
男よりとると志しし歩し中山皮  
去年畏りと朝や冷年とて進捕ま  
流をさるるらる某と名付遠方  
越

當りのうち母妻子をこるる名は物兼  
是をこら系上仕し年上の母何の善悪  
希いしやうに女を林老ら名をこ  
しめし系上人の事ねまら一應  
系の上や仕まら係はいし  
昔は何事なぬ者た中意怒を以て  
免れぬういし  
西へは系兼田印付子中山皮  
これにねし名代は神妙なる者  
りねぬしは母妻子をせし

しに年一とく白洲に於て暇乞の病  
苦をさやうする其旨に繩をとりて  
之一人上向て去りて留給年とめさし  
某年ては未いづ指の印仕業より係り念に  
悉く今生の對面と是限りたり只と  
老母への存行たのむ之に中幸いられ先  
少婦と抱遠き念之も物忘れ未練のふり  
あり終るとと中り利三人有りと云ふ  
つと云葉し好く泣く之をさきと歸り  
夫方控を情つ嬢をこと中山皮目通り

引出しける時午中山皮に中りける控を情  
とらにせりるも早未に世出るは神妙之  
影の通り母妻子にわたりきりり利  
叔母母の幸い其方年来男達を業  
とふ一先達あり世十郎をよひ年  
一西神へ一府自に糸やお吉或控を情  
長く拙者として下郎の祐をいふ年取  
上げ母妻子を少叔免とて金返先以能を  
仕今より海に随て年来男を立印に  
日月の祐ありしお吉をとりて先を須

水沖皮ふはしり付し第止車とて  
意趣なき車に中皮重て  
りし有神の十分誠り男達  
左天情の意量之悉く矣名  
唐大とて畜生の名之何故  
付しや様を情承し唐大の  
不守を家り祥し可中上は  
公方様ア義林より遊り  
たすは様とて畜生のヤ右  
此の

決して付させよやらん  
の矣名を可し上と善い  
中皮赤面ふと返言し及  
宰者付よと不知を引  
傳了町の宰へ引行りも  
たす者のうち自代目  
は戸中を召し追へる捕  
百人中皮拷問のまを車  
未年けり自分の工夫  
動解由問とて責道具を

しりしをのれを中山友監城役よりしき  
二十日まゝるりち男達ハナノ及ハも其  
介阿いまのの盗賊の教捕をせられまら  
祿年ノアヌぬヤ代としまらハ一取  
日教まゝ男達の教三十七人小川  
於ちお首を御前江戸中洲一引  
る其の首の者名を掲せりし  
道すの中山勘解由り等志や  
うらりと想いほまら獄ハの身と成  
りらまら江戸男達と云ハ相止り

中山友をせ上り魁勘解由り  
申計利ホ

元正間記 卷之九 終

